

議員研修

5/15 『対話する議会・議員』を研修

6/24 SOUND カードを活用した議員間での研修

6/27 ファシリテーション研修



『対話する議会・議員』を研修

本市議会は、さまざまな市政課題を議員同士で活発に議論し、合意形成を図りながら政策提言につなげようと、議員間討議の在り方を模索しています。その一環として、5月15日に市役所で「対話する議会・議員」と題する研修会を行いました。

講師は青森大学社会学部教授の佐藤淳さんに務めてもらい、「SOUND(サウンド)

カード」を活用した討議の手法について学びました。

カードには、「個人の感情に寄り添うために取り組みたいことは何？」など、種々の「問い」が書かれており、誰とでもどんなテーマでも短時間で和やかに対話が深められるよう工夫されていました。

佐藤さんからは、市民との意見交換や議員同士で議論する際、このカードを活用できることの説明を受けました。その上で、議員同士の対話をスムーズに進め、議員間討議に役立てていくようアドバイスされました。

カードを使った実践形式の討議では、「陸前高田市の産業振興」をテーマに議員4人ずつ4グループに分かれて主張。それぞれの意見を真剣に聞きながら合意形成を図り、グループごとに提言をまとめるなど、今後の議員活動に生かせる手法を学びました。

「SOUNDカード」を活用した2回目の研修会は6月24日、市役所で行いました。

前回同様に、議員4人ずつ4グループに分かれ、各カードに書かれた問いに従って意見を発表し合いました。

実践を交えた討議では、お互いさまざまな意見や見方があることが分かり、それぞれの考え方を共有することの大切さを実感しました。

今後も対話する議会、議員を目指し、市民福祉の向上につなげていく意欲が高まる研修となりました。

『ファシリテーション研修』

広聴広報特別委員会は6月27日、全議員を対象に、話し合いを円滑に進めるための技術を学ぶファシリテーション研修を行いました。この研修は、7月に新たな試みとして開くワークショップ形式の議会と語る会に向けたもので、話し合いをスムーズに進めるための技術を学ぶものです。講師は、陸前高田まちづくり協働センターの三浦まり江さんが務め

ました。

前半は、話しやすい環境の作り方や議論の整理手法、話を引き出すための質問方法などの説明を受け、後半は、実際にグループを作り、議会と語る会を想定したワークショップを行いました。出された意見の記録、項目の分類、論点の整理を体験し、実践を通じた学びを得る機会となりました。

7月開催のワークショップ形式の議会と語る会については、また次号で報告します。



常任委員会 活動ほうこく

産業建設

所管事務調査
サーモンの海面養殖

6/25

所管事務調査

産業建設常任委員会は6月25日、水産大手の㈱ニッスイと広田湾漁協が、昨年11月から共同で取り組んでいるサーモン(ギンザケ)の海面養殖を現地調査しました。

現地では、同社の担当者である御供俊介さんから、初年度は海洋環境や他の漁業活動への影響がないかなどを調査しているとの説明を受けました。

また、昨年12月の試験養殖開始には約180匹だった8万尾の稚魚は、水揚げ開始時には2.5倍前後に成長する等、秋以降の本格養殖に向け、試験養殖は順調に推移しているとのことでした。

養殖用いけすは、広田湾内と沖合の2カ所(滝浜・金入漁場)に直径25メートルのものが設置されています。



広田漁港で水揚げの状況視察

水揚げの作業では、養殖用いけすから水揚げ用のいけすに移した後、1尾1尾を活け締め処理し、魚体の大きさに応じてコンテナに分ける作業などの様子を視察することができました。

その後、同社事務所で、これまでの経緯などについて説明を受けました。

現在、本県の秋サケ漁は、深刻な不漁に陥っており、震災以前の1%以下の漁獲量となっています。

そのような中で、生食可能な養殖サーモンは、すしネタとしての人気も高く注目されており、県内でも盛んに取り組まれています。

試験養殖1年目・2年目は200匹を、本格養殖が確立する2030年度には、3千匹の水揚げを見込んでいるとのことでした。



サーモンをサイズ別に分類 (広田漁港)

将来は、陸前高田をニッスイの最先端養殖モデルエリアとして構築していきたいとのこと、遠隔給餌システムの技術開発をはじめ、6次産業化と併せて大きな可能性が感じられる現地調査となりました。

委員長 大坂 俊純
副委員長 伊勢 秀一郎
菅野 卓一
小林 修一
及川